資料１

令和６年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校（園）名： 広島大学附属東雲中学校

分野	重点目標（評価項目）	年度計画（中期計画・中期目標）との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
					達成状況，改善策	評価	意 見 ・ 理 由	評価	
教育課程	グローバル時代に生きる資質能力の育成	グローバル時代に必要な資質・能力の育成の観点から，各教科等において通常学級，特別支援学級が関係づいた体験型・探究型の学習を柱にした教育課程を編成し，実施する。	STEP，SMART，東雲フェスティバル，海外の姉妹校との国際交流等，特色ある教育活動を充実させる。	ポートフォリオをもとにした個人の振り返りおよび諸行事のアンケート結果を分析し，80%以上の生徒が肯定的に評価している。	どの行事・活動においても満足度は高く，3年目の開催となった東雲フェスティバルでは，約95%の生徒が学級・学年の目標を達成できたと感じている。	A	行事等を充実させることができており，生徒たちの成長が感じられる。東雲憲章を基軸として，これまで東雲中が大切にしてきたことを教職員・生徒（保護者も）が共有できるように教育活動を進めてほしい。	A	行事などを活性化することだけでなく，行事を通して，常に学校教育目標に立ち返りながら，生徒に身に付けさせたい資質・能力について，教職員間で適切に共有するよう努める。
教育研究等	東雲小・中学校での共同研究の推進	汎用的能力育成のために，各教科等の教育内容を精査しながら，学習指導法の開発を行う。	教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力（教科等の特性に応じた児童・生徒の見取りを通して）について各教科等の視点から研究を進める。	昨年度に比べて東雲研究会への参加者が増加し，実践紀要または研究紀要を通しても研究成果を発信している。また学校HP等で学習指導案や研究内容を発信する。	東雲研究会では，県外を含めて約541名（昨年度はコロナ明け，初めての対面開催で約460名）の参加を得て，研究成果を示し，ほぼ全員を満足させる結果となった。	A	研究会への参加者が増えて，その満足度も高く，教育研究が活発に行われている。今後は，日常的な授業公開など，研究成果を発信する方策の検討にも期待したい。	A	地域貢献・公立学校の模範という視点から，東雲研究会への参加者を増やす努力を行う一方で，研究成果の日常的な発信方法について検討する（さらなるHPの改善，講師派遣，オンライン研修実施等）。
	インクルーシブ教育の推進		プロジェクト研修，授業交流，教員研修等を通して，特別支援学級の教員と通常学級の教員が互いの授業について協議する。	研修や授業交流，研究協議会を年5回以上行い，その振り返りにおいて，80%以上の教員が肯定的に評価している。	プロジェクト研修を行ったことに加えて，研修会や校内での授業公開を複数回実施することができ，教員間の議論が深まった。	B	新任者研修やプロジェクト研修などを丁寧に実施している。さらに，校内での議論だけでなく，公立学校や行政機関を含む外部の教員との議論の機会も視野に入れて推進してほしい。	B	教科を越えて授業に関して教員間で議論できる環境を整えられるよう，引き続き教科にとらわれ過ぎないカリキュラム検討や研修会等を充実させる。
社会連携・社会貢献活動等	地域連携・社会貢献の推進	通常学級と特別支援学級を有する特色や小中連携を行っている教育研究の拠点校として情報発信する。	本校の教育実践を地域住民に向けて発信するとともに，他附属学校や近隣の公立学校 からの視察，授業交流，地域との連携事業をや訪問を積極的に受け入れる。	地域住民に向けて教育成果を発信できる機会を得られるように努めている。また，可能な限り他校からの視察を受け入れている。 地域の模範学校として，他附属学校や公立学校への講師派遣を積極的に行う。	地域とのつながりを求めて，生徒の作品を仁保公民館へ展示させていただいた。また，特別支援学級の生徒が授業の一環として，定期的に地域清掃に出かける機会を設けて，地域の方々とも交流した。	B	公民館での展示や地域と連携した活動を通じて地域社会とのつながりを大切にしている。今後も同様の教育活動を継続・発展していくよう努めてほしい。	A	仁保公民館と連携した活動や地域に出かける教育活動を継続させるとともに，学校全体として地域と結びつき，貢献できる活動についても検討する。

注） □太枠内は，学校関係者評価委員会が記入する。

令和６年度　学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校（園）名：　広島大学附属東雲中学校

分野	重点目標（評価項目）	年度計画（中期計画・中期目標）との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
					達成状況，改善策	評価	意見・理由	評価	
学校経営・安全管理等	チーム東雲を意識した学校経営	学校教育の基盤となる健康，安全，安心の確保及び附属学校としての使命の遂行の観点から，教員配置の適正化と教育研修の改善を図るとともに業務内容の整理による業務改善を行う。	学校長のガバナンスを徹底し，副校長がしっかりと連携を図り，学校経営基本方針に基づいて教育活動を推進する。	教職員間で東雲の特色を活かした附属学校の使命を共有するように努め，学年・分掌において，主任や部長がキャプテンシーを発揮した組織的な対応ができる。	約90%の教員が管理職・部長・主任を中心として業務が遂行されていると感じており，部内・学年内で互いに協力して業務を進めている。	A	管理職・部長・主任を中心とした学校経営が適切に行われている。人事交流で広島県・市から来ている教員がやりがいを感じられるように，東雲中の大切にしていることを共有できるような働きかけを期待したい。	B	教職員間で附属学校の使命を改めて共有するよう努め，学年・分掌等において，主任や部長がリーダーシップを発揮できる環境を整える。
	危機管理と安全な学校環境の整備		年3回の避難訓練を実施するとともに，安全衛生委員による定期的な点検を行う。	コロナ禍後，初めて行う小中合同避難訓練や自然災害時の教職員の動きを振り返ることにより，生徒・教職員から危機管理や防災教育に関して改善点や課題が挙げられている。	年3回の避難訓練に際しては，事前・事後の学習を充実させることができ，活発な議論を行うことができた。	B	定期的な校内の安全点検を全教職員で分担して実施したり，生徒の議論を中心にした避難訓練を適切に行うことができている。今後も教職員・生徒それぞれが当事者として取り組むよう期待したい。	A	安全点検の結果をもとに環境改善を行うとともに，授業を通して，生徒・教職員の防災意識を高める実践を継続する。
	勤務時間管理と業務内容の改善		分掌・学年において，業務改善につながる提案を促す。 時間割の中で連続空きコマを設定し，日中に業務に取り組める時間を確保する。	業務改善の方策等について，自由に議論できる土壌のある風通しの良い職場を目指す。勤務時間外の在校時間を月42時間以内とする組織目標の達成率を80%以上にする。	勤務時間外の在校時間は，月42時間以内とする組織目標の達成率80%以上を達成できた。また，業務内容の改善を意識する雰囲気が出てきている。	B	教職員の間で業務改善を行おうという意識の高まっている点が評価できる。これからは，勤務時間外の在校時間を月42時間以内とする組織目標の達成率を90%以上にすることを意識して取組を進めてほしい。	B	教職員全員が業務改善の個々の重点項目について意識を高め，学年・分掌等において，業務改善の方策を自由に議論できる土壌が整ってきた。勤務時間外の在校時間が月42時間をこえる教員は固定化しているので，仕事の優先順位のつけ方について今後も面談を継続する。
グローバル対応	国際交流の充実	グローバル時代に必要な資質能力を実際の国際交流を通して育成する。	海外姉妹校の相互の来日・渡米交流を実施し，今後に向けて軌道にのせるとともに，新たな方策を模索する。	取組の状況や振り返りの内容を検証し，8割以上の生徒・教職員が国際交流を肯定的に捉え，今後の展望として姉妹校の関係教員間の連携をより強化する。	姉妹校の来日交流については，多くの生徒がおもてなし委員に立候補し，ホストファミリー（家庭）だけでなく，学校全体で迎える環境が整ってきた。また，来年度実施予定の渡米交流に関する説明会を2/28に行う予定である。	A	国際交流への関心が高まり，生徒の資質・能力を向上させている。今後も継続していけるよう努めてほしい。また，渡米に関わる経済的負担については，外部資金の調達など，方策を検討してみてほしい。	A	来日交流および渡米交流について，円滑に業務を進められるよう，姉妹校の関係教員間の連携をより強化する。また，渡米交流における経済的負担を軽減する方策を検討する（過年度からの継続的な課題）。
教育実習	教育実習の充実	今日的な教育課題と学校の特性に応じた教育実習の在り方について検討する。	教育実習生に特別支援学級の存在を意識させ，教科の本来の魅力に迫る深い学びを目指す授業づくりを指導する。またそのことによって，教師自身が成長する。	教育実習生を対象としたアンケートにおいて，80%以上の実習生が実習指導に満足している。また教師教育の視点で，80%以上の教職員が次世代の教員の育成に向けて長期的展望がもてている。	全員の教育実習生が実習指導に満足しており，昨年度と比べると，自分自身の資質能力を肯定的に捉えている割合が高い。	B	教育実習生は満足度も高く，自身の資質能力に目を向けることができている。次代を担う教員の育成に向け，長期的な展望をもって教員養成を行ってほしい。	A	教科における授業力・指導力を習得できるよう指導することを通して，教員に求められる資質能力について考え，教職への展望をもたせる。

注）□ 太枠内は，学校関係者評価委員会が記入する。